

The executioner was usually presented with a warrant authorizing or ordering him to execute the sentence. The warrant protects the executioner from the charge of murder. Common terms for executioners derived from feudal capital punishment—the 嵐龍 死刑執行人の解放 殺人衝動—they often also performed other physical punishment 試し読み—include hangman and headsman. In the military, the role of executioner was performed by a soldier, such as the provost. A

第一章 殺人衝動

颯間 風。そうま かざみ 中学二年生。成績は中の上。友達はそれなりにいて女友達もいる。ごく有り触れた少年である。

いや、一つだけ普通ではない点と言えば、それは殺人衝動である。

もちろん、人を殺したことはない。しかし、時々理由もなく人を殺したくなるのである。

誰でもいい。ただ、刀で斬り殺したい。銃で撃ち殺したい。そして、殺した後の愉悦とうすいに陶醉したいのである。

俺は、そんな異常な感情を誰にも打ち明けられずにいた。

そう、あの日までは――



学校が終わり、あたりが暗くなっていく家路を独りでのんびり歩いていた。

夏が過ぎ、小川沿いの道を吹く風が涼しく心地良かった。

普段人をあまり見かけない川沿いの道を歩いていると、川を挟んで声が聞こえてきた。

少し先の橋の近くで三人組の男と一人の女の子が口論になっているようだった。

男達は高校生ぐらいだろうか？少なくとも知っている人ではない。見るからにガラの悪そうな連中だった。女の子の方は知っていた。同じ

クラスではあつたが、話したことはなかった気がする。男子からはソコソコ人気のある女子だった。

(見た感じナンパだな・・・)

ガラが悪い連中にもムカつくし、ここは女の子を助けてイイところ見せようかと思ったその時、それは起こった。

“ねえ？殺さない？”

(ヴッ・・・また・・・)

“フッフッ・・・殺そうよ”

(やめ・・・)

「ああ・・・」

俺は焦る気持ちを抑え、その場にしゃがみ込んだ。

（こんな時の対処法は“相手を見ない”事だッ！ 見なければ実行に移らないッ！）
動悸を沈めるため深呼吸をし、現場を見ないようにしながらその場から早足で逃げた。



家の前に着いたころには、息切れはしていたが冷静になっていた。

（ハア・ハア・ハア・ハア・また起きちゃったか）

幸い、今日は自宅に両親はおらず俺は玄関に座り込み、呼吸を整えた。

（これで人を殺したくなるのは何度目だっけ・・・）

いつからかは憶えていないが、今日のように人を殺したくなるのが何度かあった。最初は友達との喧嘩が発端だったと思う。先生が止めていなければ、手元にあった鉛筆で相手を刺していたかもしれない。最初は一時的な興奮がきっかけだと思った。しかしその後、突発的に殺人衝動が起ころうになった。ただ単に通りすがっただけで殺したくなったりした。その時は決まって頭の中で「殺せ」という声が響いた。もちろん、人を殺せば罪になる事ぐらいは理解している。だから俺は必死に衝動を止める方法を考えた。そして、相手を見なければ殺人衝動が起ころないことに気づいた。

——— それ以来、殺人を実行したことは一度もない ———

第二章 覚醒

目覚めの良い朝だった。昨日は疲れていた事もあり、殺人衝動も慣れていたもので熟睡できた。制服に着替え、今朝のニュースを聞き流しながら朝食を食べた。玄関に向かい、いつてきますの挨拶をして家を出た。

学校に着くと、大勢の生徒がすでに登校していた。いつもと変わらない風景を見ながら、昇降口へ向かった。

靴を脱いで、上靴に履き替えようと下駄箱を開けた時、上靴と一緒に白い封筒が入っていることに気づいた。ラブレターだと思った俺は、ここで開けるのは恥ずかしいと思い、靴の中にサッとラブレターを隠した。

教室に入ると、多くのクラスメイトで賑わっていた。もうすぐH R ホームルームが始まる時間だ。俺は席に着き、誰も見ていない事を確認してさつき

のラブレターを読むとした。靴に手を入れ、ラブレターに手を伸ばしたとき、声を掛けられ焦った。気づかれたことに驚いたのもあったが、話しかけてきたのが昨日、橋で見かけた女子だったからでもあった。

(昨日見てたのバレたかな・・・)

何もせず走り去ったことに対して怒られると思い身構えていたが、その子の言葉に驚愕した。

「どうしてあんな事したの・・・？」

彼女の声は震えていた。何かに怯えているようだった。いや、俺に怯えているようだった。俺は一瞬声が出なかったが、昨日の事を指して言っているのか、何があったのかを聞き出そうと口を開きかけたが、彼女は俺から逃げないように立ち去ってしまった。

少女の後を追おうとしたが、不意にラブレターが頭の中を過った。もしかしたら、彼女が俺に何かを伝えたくて手紙を出したのかもしれない。昨日の答えがそこに書いてあるかもしれない。そんな期待を抱いて、靴からラブレターを取り出した。封を開けて手紙を取り出し、俺は手紙の文字を見て背筋が凍った。

お前々見たるぞ

※続きはWebで！

★この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありません。

本書の一部あるいは全部を、著作権者の承諾なく、転載、複写、複製、公衆通信(放送、有線放送、インターネットへのアップロード)、翻訳、翻案などを行うことは、著作権法上の例外を除き、法律で禁じられています。